

人間中心主義の克服の裏にある、

ホロコースト

大量死と燔祭に対峙する倫理

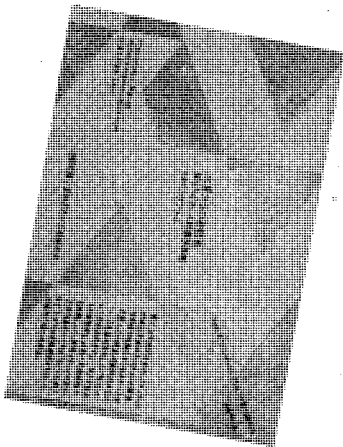
ウェルズの書き直しからヒロシマへの最初期の応答、
アヴァンギャルド詩集までも含んだすべて初訳の作品集

岡和田 晃

スタニスワフ・レム 著
沼野充義・芝田文乃・木原慎子 訳

▶ 火星からの来訪者

知られざるレム初期作品集
2・26刊 四六変型判376頁 本体2700円
国書刊行会



スタニスワフ・レム（一九二〇〇〇）の実質的なデビュー作は、これまで『金星応答なし』（一九五二）だとされてきた。同作はソヴィエトSFの伝統を色濃く受け継いだ作品で、共産主義イデオロギーへの幻滅や人間中心主義の克服が見られず、スターリン体制下の東欧という状況を如実に反映しているという欠点こそあれ、作家の独創性の萌芽は汲むに値する——とこう注釈付きで読まれてきた（沼野充義訳、ハヤカワ文庫SF、邦訳一九八二一ほか。二長編『マゼラン雲』（一九五五、後藤正子訳、国書刊行会、邦訳二〇二二）も概ね同様で、本紙二〇二二年九月三日号での拙書評ではそこから半歩、踏み込んだ見方を示したつもりだ（なお、芝田文乃の名を誤記していたので、この場で訂正したい）。しかし、当該書評でも紹介した深見弾によるインタビュー（『SF Prologue Wave』に「SF宝石」一九八〇年六月号、再録）において、レム自身は

『マゼラン雲』に先立つ「火星からの来訪者」（一九四六）に關し、「また医学生だったころに書いた、わたしのSF処女作だ」としながら、『マゼラン雲』より「もっとできが悪い」（強調原文ゆえ、「本にはしたことがない。だからあのへ青年時代の息子の」とまで明言していた。かような口付きの「火星からの来訪者」ほか、本書には作家が二〇代に書いた小説や詩が収められている。当然、すべて本邦初訳だ。

「火星からの来訪者」（芝田文乃訳）は敬首された新聞記者のマックモアが、火星が打ち込まれたミサイルに落ちていたアレアントロポス（「火星人」）を示す造語の調査に巻き込まれるという中編である。読んで真つ先に連想するのは、H・G・ウェルズの『宇宙戦争』（一九一八）だ。レム自身、『宇宙戦争』を愛読していたが——モンスター・パニックな展開は共通するものの——「火星からの来訪者」では、研究所という閉鎖空間で起きた騒動という形に枠組みが限定され、そのぶん、火星人の特異な生態がより綿密に描き込まれている。なにせ、アレアントロポスは三本の触手を備えた「脳の形をしたゼリー状の光る物質を持った金属製の円錐体」なのだ。しかも、原子力エネルギーを動力としているらしく、研究チームには放射線による死者も出ていた。

とりわけ会話の訳に直訳調の生硬な箇所が散見されるのが玉に瑕だが、サスペンスフルな導入や迫撃砲で火星人に応答する場面など、良い意味でアメリカのバルブSFのように読める。そもそも舞台からしてニューヨークであるし、アレアントロポスの造形はH・P・ラウクラフトが「アスタウンディング・スト

リーズ(一九三六年六月号)に發表した「時間からの影」に出てくるイスの偉大なる種族のようだ。ただ、サイパネティックスの見地より異星人のあり方を構想する点からして、結局のところ地球人が金星人に出逢うことのないまま終わる『金星応答なし』ではなく、むしろ未知の惑星レギスIIIに登場する群体状の機械としての異星人との攻防を描いた「インヴィンシブル」(一九六四年、関口時正訳、国書刊行会、邦訳二〇二二)と連続させて読むのが正解かもしれない。

本書所収の他の短編小説にも言及しておこう(すべて木原槇子訳)。「ラインハルト作戦」(一九四九執筆)はナチス・ドイツによるユダヤ人の強制移送・絶滅作戦を正面から扱った作品だ。視点人物の医師シユテファンは非ユダヤ人でありながら場当たり的に收容され、そのまま行き着くところまで行き着いてしま

う。将校らが交わすドイツ語でのやり取りが随所に挟まれ、小品ながらも緊迫感あふ

れる。同じ医師シユテファンを視点人物に据えた「トクトル・チシニエツキの当直」(一九五〇頃執筆)は、戦後の産科医の姿を徹底したリアリズムで描く。夫がウルシヤフ峰

起の頃から伏せていると語る妊婦の描写等、同時代の状況が克明に記録されているのだ。どちらも独立して読め、異様な迫力が宿っている。がシチユエーションの切り出し

という印象も否めないのは、もともと長編小説三部作「矢われざる時」(一九五五)における第二部と第三部に収められていたものだったからである。第一部「主の変容病院

」には日本語版があり、『主の変容病院・挑発』所収、関口時正訳、国書刊行会、邦訳二〇一七)、しばしばトーマス・マンの『魔の山』(一九二四に擬えられてきた。ただ、

『魔の山』のごとくサナトリウムと大戦の戦火が画然と分かれていたわけではない点に批評性が宿る。

人間中心主義の克服の裏にある、大量死と燦然への倫理的な問題意識——それはまさ

しく、レムの創作を貴く重要な柱で、狭義のSFファンに限らない日本のレム読者が、本格的に向き合ってこなかった主題である。永久機関の発明という突飛にして究極のSF的アイデアを扱う小品「異質」(一九四六)でさえ、ナチスによるロンドン空襲は背景描写に留まっていけないのだから……。まさにこの点において特筆すべきが、諜報員たちの視点からアメリカ力による原爆投下を扱う「ヒロシマの男」(一九四七)だ。世界でもっとも早い時期に書かれた「原爆文学」の一つであるのは間違いなく、作家論的な文脈を描いても広く読まれるべき問題作である。

原爆投下から一ヶ月に満たない一九四五年九月下旬、アメリカ陸軍航空軍のプレス・ツァーが広島・長崎を訪問したが、取材内容は掲載に至る過程で歪められ、彼らの報道に限らず残留放射線の影響は、日本側のプロパガンダとしてアメリカ当局によりひた隠しにされてきた(繁沢敦子「被爆地を訪問した米従軍記

者が本国で引き起こした波紋」・小池聖一編「原爆報道の研究」、現代史料出版、二〇三三)。けれども、レムは何がプロパガンダで何がそうでないかを見分けられるだけのリテラシーを、すでに備えていたのだろう。ちなみに、連が原爆保持を公表するのは、一九四九年を待たねばならない。

確実に言えるのは、ジョン・ハーシーの『ヒロシマ』(一九四六)をポーランド語版が出る前に読んで「ヒロシマの男」を書いたことだ。「ヒロシマ」に出てくるドイツ人ウイヘルム・クラインルゲ

神父が直近で爆撃に巻き込まれたのに生存した者として、「ヒロシマの男」には登場するのである。クラインルゲは原爆症に苦しみ、にもかかわらず思想を貫き、日本人々と文化への愛を捨てなかつた(日本に帰化することま

でした)。こうした神父の位置が、レムの関心を惹いたのは間違いないだろう。「ヒロシマの男」では原爆が投下される瞬間が壮大なスペクタクル

として描写されるが、あくまでもそれは、倫理的な問いとセツトなのだ。なお、レムは同じ一九四七年、「原子の町」(芝田文乃訳、「SFマガジン」二〇二二年二月号)という核開発と科学者をテーマにした作品も書いている。

本書の挿尾を飾るのは「青春詩集」(一九四七〜四八執筆、沼野充義訳)だ。ここに集められた詩群を特徴づけるのは、宇宙論的なスケールでの脱人間主義の志向性と、大量死の時代における倫理の模索が背中合わせになっている点である。例えば「ペートウエン」、交響曲第五番」と題された詩では、「見よ、曇った天空が脇にどかされ、昼と夜が両手でわれらの地球を抱きしめ、その黒い球体には詩が刻まれている」まるで名付

け得ない地平線に満たされた骨董のよう」と、運命のあり方が寓喩として描かれる。本書の解説で沼野充義は、イェジィ・ヤシェンブスキを引きながら、レムの詩がポーランド文学史における一九三〇年代以降の「第二次アヴァンギャルド」に位置付けられるという説を紹介している。沼野も翻訳に参加したチェスワフ・ミウォシュ「ポーランド文学史」(一九六九、関口時正ほか訳、未知谷、邦訳二〇〇六)——レムの項目も設けられている——によれば、戦時中に自己形成し、フアンズムの時代を生きた延びた第二次アヴァンギャルドの詩人たちは、シュレアリズムに代表される前衛的な技巧を継承しながらも、反審美的な装いをもって形式的な単純さを要求する「強烈な感情」への折り合いを付けようとした。カオスと空無に対してシニカルにならないためというのだ。こうしたアヴァンギャルド詩の文脈から、レムのSFにおける技術と倫理の関係を再考していくことは十二分に可能だろうし、反共イデオロギーと新自由主義の浸透によりソヴィエト(ロシア)・東欧SFが不当に軽視されてきた日本においては、そういう領域横断的なアプローチこそが切に求められている。(文芸評論家・現代詩作家)